

自由律俳句協会

ニュースレター一五号(令和元年六月十一日)

編集責任者*野谷真治

文学フリマ(東京)好評でした

白松いちろう

5月6日(月)東京流通センター・第一展示場で開催された文学フリマ・東京は約6千人の若者を中心に文学愛好者が参加しました。自由律俳句協会として初めての出展でしたが、令和時代の始まりに相応しく、希望を抱かせるスタートとなりました。全体で約1000ブースの出展の内、俳句関係は「海紅社」と当協会の2ブースのみでした。自由律俳句関連が隣同士でしたので、より効果的にアピール出来ました。

来店者の中には、初めて自由律俳句と触れる方もある一方、遠路浜松からわざわざ訪ねてこられた方もありました。自由律俳句はどう創れば良いかの質問もあり、松の会の「自由律俳句の手引き」を役立たせて頂きました。

今回は、会員の有志から多くの作品・資料を提供していただきました。初めての出店でしたので、今回基本的には無料で提供しましたが、次回からは有料で対応したいと思います。今回の経験を基に、より良い形で次回以降に備えるべく意見を集約して参ります。皆さまのご意見をお待ちしています。

●今回の展示資料

- ・自由律句壇クラブ「群妙」No.21〜25
- ・自由律句報「常磐ネットワーク」第23回高田弄山・中編
- ・俳句作家選集第5期第1巻「熱い血」久光良一句集
- ・「きやらぼく」句集・冊子
- ・三好草一・栄子句集
- ・口語自由律俳誌「新墾」
- ・自由律俳句誌「青穂」
- ・木村緑平顕彰会。パンフレット
- ・「ぎんなん」句集、冊子
- ・佐瀬房吉・佐瀬志づ子句集
- ・金子美代句集
- ・機関誌「茉莉花」
- ・「層雲自由律」
- ・近木圭之介句抄
- ・層雲叢書シリーズ「北朗」
- ・草原会員自選句集「かもめ」

・句集「傀子二集」 ・「草原」100号記念「随庵…コレクション」
・月刊随句誌「草原」 ・さはらこあめ句集「く」
・自由律三人句集「ベクトルのはじまり」(小森裕之、佐川智英実、松尾貴)

・九官鳥の会「自由俳句会の便り」・西山典子句集「孤独な耳」
・松の会句集「松」 「自由律俳句の手引き」

(有料)

・尾崎放哉・全句集 ・「無伴奏」岡田幸生句集 ・「新しい靴」天坂寢覚句集

自由律俳句への窓 その三

佐瀬広隆

自由律俳句の歴史を眺めてみたいと思います。

近代の俳句は子規から始まります。子規は、月並みに陥った俳句に対し、生の自然を客観的に描写する「写

生」の大切さを説き、俳句を革新しました。子規のまわりに碧梧桐、虚子等が集まり、それぞれ更なる俳句の追求が始まりました。

虚子は「俳句は、花鳥諷詠の詩」であるとし、これまでの俳句の伝統を引き継ぎ、季語を含み5・7・5の定型律を主張しました。

碧梧桐や乙字は、俳句の更なる革新を志向し、新傾向俳句(これまでの俳句の伝統を引き継ぎながらも、季題、十七文字の制約をゆるめ5・5・3・5)を推し進めました。

乙字は、俳句の内容としての特性は二句一章(一行の中に一つの切れをもつ)とし、井泉水は「二個中心論」、碧梧桐は井泉水の「二個中心論」にヒントを得、左記の句をあげて「無中心論(中心点のある句は人工的加味があるが、無中心の句は談話のようなもので、中心を捨てて偽らざる自然の表現に)」を展開しました。

雨の花野来しが母屋に長居せり 響也

井泉水は俳誌「層雲」を発行、「俳句は季題無用の一

つの段落をもつ一行の詩である」としました。その後井泉水は季題について碧梧桐との意見があわず袂を分かちます。中塚一碧楼は碧梧桐と共に新たに俳誌「海紅」を立ち上げ、自由律俳句は二つに分かれました。その後「海紅」に参加していた乙字は碧梧桐と袂を分かち、新傾向俳句は三つの流れに分裂してゆきました。

大雑把に歴史を振り返ってみました。子規から始まった近代の俳句を文学的位置まで引き上げようとしてきた先人達の情熱がそこにはあります。

虚子もただ伝統的な俳句を守るということではなく、俳句の伝統的なリズムの大切さ、日本的な大和言葉の素晴らしさを無くして俳句という文化はあり得ないという裏打ちされた信念があつてのことと思います。そうした定型俳句でも、旧態依然ではいけないと、俳句の革新が行われ、型や内容の自由律化（破調、無季句の容認、俳句の一行に詩がなければならぬ等）が行われていきます。

明治以降の文明開化に、西洋の文化の波に洗われ、芸術としての俳句を追求していった新傾向の流れがありました。新傾向から自由律俳句への流れの中でも、日本的情绪を大切にしようとする保守化に転じた乙字や人間的・

宗教的な道を求めていった井泉水は、俳句に対し行きつ戻りつの葛藤の連続であつたことは間違いないと思います。そうした中で井泉水の層雲自由律は放哉、山頭火を生み、量的には恵まれませんでしたが質の面では俳句に多大な足跡を残しました。

短律への挑戦

その一つに短律への試みがあります。

俳句は、十七文字。自由律俳句では、長さについては一息で言える程度だと井泉水は述べています。井泉水は、具体的な数字を述べていませんが、上田都史はそれを二十六文字以内と考えました。層雲では十七文字より短い俳句を短律、長い俳句を長律と呼んでいます。その短律への試みは、層雲の黎明期に行われました。

陽へ病む

大橋裸木

たった四文字の句です。皆さんはどう思うでしょう。こんなのは俳句ではないと思いますか。当時、定型

の人達はこの句を俳句と認めませんでした。乙字流にいうならば二句一章、「陽へ」で切れ「病む」と。短くはありますが、ちゃんと新傾向俳句の体をなしています。井泉水はこれを俳句と肯定しました。

俳句で大切なことはこの中に「詩」があるかということとです。「詩」という定義もちゃんとしなければ曖昧模糊としたものの言いようになってしまいます。広辞苑では「詩」は「風景・人事など一切の事物について起こった感興や想像など一定のリズムをもつ形式として叙述したものの」とあります。一切の事物に五感にふれ生じる感興が句の中にこめられているかということになります。この句は、太陽という「事物」を見上げ、病む体で、治りたい、生きたいという作者の祈りにも似た苦悩の様子が表白されているのが容易にわかります。この句の中に生き生きとした詩があることが認められると思います。

次に季節感です。太陽はいろいろな太陽があるので、この句に季節はありません。そうなら句全体から季節は読み取れないでしょうか。小生は、病人が見ている太陽なので、強いものではない光りの弱まった太陽を想像します。そう、冬の太陽。太陽からくるイメージの病気は「結核」かなと想像が膨らみます。この句はたった四文

字の、著しく凝縮された句の状態です。

この俳句から、俳句たる要素でないものは、十七文字の約束だけということになります。この句の考察から、俳句は内容的に十七文字を緩めても俳句性は失われないと私は思います。俳句にはこうした自由律俳句という行き方もあることを如実に示していると考えます。

短律の句をいくつかあげてみます。

わらやふるゆきつもる

荻原井泉水

音はしぐれか

種田山頭火

咳をしても一人

尾崎放哉

かげもめだか

沼尻陽三郎

音で歩

長谷川了乙

参考文献

俳句講座 俳論俳文篇 第四卷 改造社 昭和七年

乙字俳論集 大須賀績著 乙字遺稿刊行会 大正十一年

自然の扉 荻原井泉水著 東雲堂書店 大正三年

虚子俳話（続） 高浜虚子著 東都書房 昭和三十五年

此の道六十年 荻原井泉水著 春陽堂書店 昭和五十三年

投句欄 自由律の泉

①

1 散つて影を染める

新山 賢治

2 葉桜がピクリツともせず春日和

和崎 はると

3 伸びる豆苗空見る若葉

田中 美太

4 宅配の青年に子が産れ露地駆ける靴音

小山 榮康

5 語りあうことまだある散るなよ桜

金澤 ひろあき

6 愛でも恋でもないが二人で積木

黒瀬 文子

7 風鈴がときどき風を思い出している

久光 良一

8 さくらひらひら蝶になる

無 一

9 令和とや昭和一桁昔むかしの爺と婆

高村 昌慶

10 家系図の余白菜の花がいつぱい

井尾 良子

11 満月を片目で見ている

阿部 美恵子

12 吊革に届いて握れない私につかまる孫

伊藤 哲英

13 昭和、平成と生きのびて令和はどんな花が咲くやら

石竹 和歌子

14 誰も知らない行列の先

吉本 知裕

15 すりガラス少し開いてる あんたの心

佐川 智英実

16 春を待つたなごころ 掌 水のかたち

野谷 真治

17 旅立ちへの躊躇い風の綿毛タンポポ

佐瀬 広隆

18 手書き文字の部屋に寝て起きる

富永 鳩山

19 天に星地に花の降る宇宙

植田 鬼灯

20 続きは言わない雨に張り付いた裾

富永 順子

泉 鑑賞

棚橋麗未

5 語り合うことまだある散るなよ桜

満開の桜の下で、越し方・行く末・人生等話したい事が一杯ある。話尽きるまで桜よ、散らないでいてくれ！との願望。わかるな。

8 さくらひらひら蝶になる

青空の深さに吸いこまれて行きそうな蝶の姿、光一杯みなぎっている様に心惹かれた。

10 家系図の余白菜の花がいっぱい

家系図の余白に、菜の花の光一杯みなぎっている様子が何とも美しい。大好きな作品。

17 旅立ちへの躊躇い風の綿毛タンポポ

散らない花はない。タンポポの綿毛を吹いて遊んだ子供
の頃が懐かしい。今旅立つ人の胸さわぎ、ためらいと、
散る花を惜しむ気持ち、旅への不安、自然の流転をタンポ
ポの綿毛に託して、人生をみつめ直している。巧みな作品
です。

19 天に星地に花の降る宇宙

宇宙の真実、神秘・雄大な作品に心のまれた自然への讃
歌に脱帽、感動しました。

● 係より

沢山の作品をお寄せいただき、ありがとうございます
。始めたばかりで試行錯誤ですが、今回は棚橋麗未さん
にお願いをして、好きな句を鑑賞していただきました。

次回のお願いです、同封の投句用紙に皆様の作品一
句と、今回寄せられた作品に感想(100字程度まで)を
いただきたいと思います(いずれか一方でも)。メールで

も受け付けます。

皆様方のお知恵を借りながら「泉」を育てていきたいと
思いますので、よろしくお願いいたします。

送り先 〒193-0832 八王子市散田町2-58-4

平岡久美子

メール kumiko801@wh-wing.net

締め切り 2019年6月末日

★「作品はやはり縦書きにしたい」との声を受けて、ニュー
スレターを今号より縦組みにしてみました。今後、会員の皆
様からのお便りや、事務局に寄せられた声などもご紹介して
いきたいと思います。投句募集やイベントなどの情報もお待
ちしています。

横浜俳話会 第16回俳句シンポジウムのお知らせ

- テーマ 「私の俳句の考え方」
—伝統派から自由律まで 各俳人の考え方を探る—
- 日時：2019年7月15日（月・海の日）
13時30分～16時30分（受付開始：13時より）
- 場所：かながわ県民センター 2階ホール
神奈川県横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2（JR横浜駅より徒歩5分）
- 資料代：500円
- コーディネーター：鹿又英一（『蛮』主宰・『豈』同人）
- パネリスト：尾崎竹詩（神奈川県現代俳句協会会長）
酒巻英一郎（『ロータス』同人・『豈』同人）
田中耕司（『海紅』同人）
寺澤佐和子（『未来図』同人・『蛮』会員）
- 司会：望月英男（横浜俳話会幹事長）
- 主催：横浜俳話会
- ホームページ <https://yhaiwakai.wixsite.com/haiwakai>
★自由律俳句界から、「海紅」の田中耕司氏がパネリストとして登壇されます。

自由律俳句協会の会員を募集します

「自由律」の活動を文学史に深く刻むために、主張の違いを乗り越えて「ゆるやかな結束」を呼びかけ新たな会員を募ります。

◆年会費 個人会員3,000円 結社・グループ会員3,000円 学生会員1,000円

◆申込先 〒270-2329 千葉県印西市滝野2-6-16 白松いちろう方

自由律俳句協会事務局 e-mail: siroo@mist.ocn.ne.jp TEL&FAX 0476-80-9177

※入会申込書は自由律俳句協会ホームページからもダウンロードできます。

協会を運営するために、以下の口座に会費納入を何卒よろしく願います。

郵便振替 口座記号番号 00180-9-417884 加入者名「自由律俳句協会」

ゆうちょ銀行 記号 10050 番号 03963121 自由律俳句協会

※ゆうちょ銀行口座から振り替える場合は振込料が無料になります（回数制限あり）

自由律俳句協会 ホームページを活用してください。

<https://www.自由律.com/>